

「グリム童話」と三人のグリム兄弟

(ヤーコプ・グリム、ヴィルヘルム・グリム、
ルートウィッヒ・エミール・グリム)

美谷島いく子

ここ信州にも、待ち遠しかった五月が巡ってきました。私は、朝の光の中で、窓を開けて芽吹いたばかりの公孫樹、樺、白樺の梢を渡ってきた若緑の微風を、心地好く感じながら筆を執っています。

「グリム童話」とそれを世に送ったグリム兄弟、即、兄のヤーコプ・グリム、弟のヴィルヘルム・グリム、そして更に、第二版の「グリム童話」に口絵とさし絵を描き、子どもにより身近かなものにした末弟のルートウィヒ・エミール・グリムについて、したためてみようと思うからです。

恰度、一年前の、この爽やかな季節、野の花が咲き、小鳥が歌う五月に、私達一家は、三年半ぶりに、西ドイツの、グリム兄弟縁の大学の街マールブルクに滞在する機会を得ました。

マールブルクは、グリム兄弟が、ザヴィーニ教授と、運命的な出会いをし、後期浪漫派の人々との交わりの中で、グリム童話の種を育み始めた地です。又、このヘッセン地方からは、「灰かぶり」「金の鳥」等のグリム童話が、名も知れぬ人々の口伝えに従って集められました。今でも、市庁舎の近くにあるグリ

ム兄弟の下宿から、ザヴィーニ教授の家に通ずる坂の多い石畳の道を歩いていると、昔話語りのおばあさんのような民族衣装を着ている老婦人に、時々、出会います。

私は、限られた渡独の荷物の中に、迷わず、岩波文庫、金田鬼一訳の「グリム童話集」と高橋健二著「グリム兄弟」（新潮選書）を入れました。私のドイツへの旅は、グリム旅行でもあるのですから。

「今更、なぜグリムを？」と、訝しげに思われるかもしれませんが、実際に、毎日、娘に様々の話を読んでやっていて、最も、目を輝かせて聞いてくれるのが、他ならぬ「グリム童話」だったからです。適当な話や絵本がみつからず、何にしようかと迷う時、決して娘の期待を裏切らないのが、「グリム童話」なのです。

更に、不思議なことには、娘にグリム童話

を読んでやっている私自身が、グリムと初めて出会った幼い頃とか、学生時代に、河合隼雄先生、秋山達子先生の講義に胸踊らせていた時とは、全く違う所に、妙に心をひかれてしまうことです。一人になった時、何度も心の中で、その件くだりを言ってみることが多いのです。

私が、どんな件を、つぶやいてみるのかは想像に、お任せすることにして、ドイツでの娘とグリム童話との出会いを、少しお話ししてみましよう。

娘達も、この季節には、とりわけ元気で、ゲステ・ハウスの前庭を、風のように走り回りました。堇、白詰草、達磨草、蒲公英や、他の名も知らぬ白や紫の野の花を摘み、ルートヴィヒ・エミール・グリムがグリム童話集の口絵に飾ったような花環を編んで、王女様の冠にして歓声をあげていました。

そんなふう遊び惚けた後でも、まだ、おめめは、パッチリで、ベッドに入っても、グリム童話をせがむので、毎晩、ひとつずつ話してやるのを日課としておりました。

六才になったばかりの長女は、「三枚の鳥の羽」の話が大好きで、全部覚えて、隣人に話してやったり、その話の中からの遊びをよくしました。

：（王様は、王子たち）三人をお城の外へつれだすと、鳥の羽毛を三枚、空へ吹きとばして、「この鳥のはねのほとんどいっくほうへ出かけるのだぞ」といきました。一枚のはねは東のほうへ飛んでいきました。もう一枚は西のほうへとんでいきました。けれども、三枚目のは、まっすぐに飛びあがったばかりで遠くへはとんで行かず、まもなく地面へおちました。それで、一人のお兄さんは右へ行き

ました。もう一人のは左へ行きました。お兄さんたちは抜作をあざわらいました。抜作は三番目の羽毛の番人として、いつまでもそのはねの落ちてきたところをどくわけにはいかないのです。

抜作はべったりすわって、しょんぼりしてしまいました。ところが、ひょいと気がつくくと、はねのそばに落とす戸があります。……（岩波文庫「グリム童話集」

(二)

この件くだり、絨毯、指輪、花嫁を探しにゆく所で三回出てきます。

娘は、この三枚の羽毛を、空へ吹き飛ばして三兄弟が行く先を決める所に、すっかり心を奪われてしまったらしいのです。昔、ドイツでは、行先が決まらない時、羽を吹いて、それが飛んで行った方向に行く習慣があったそうです。娘は、マールブルク大学の植物園

や、ウィーンのブルク公園等に、散歩にゆきますと、必ず、鴨や白鳥の羽を拾ってきては、羽を飛ばしてみる遊びを始めるのです。

特に、三枚目の抜作の羽が、真つすぐに舞い上がり、落ちてくる所が不思議らしいのです。見ておりますと、風が少しでもあると、羽は、その方向に飛んで行ってしまい、なかなか抜作の羽のように真つすぐ下へは落ちません。

ある時、娘は、「ドイツには、一杯、羽が落ちていでしょう。羽って、魔法^{マジック}使いの魔法の杖みたいな、とても不思議に思えるの……もしかしたら、羽が落ちた所から、戸が開いて、カエルが出てくるかもしれないでしょう。」とポツンとつぶやいて、折紙で藝を何匹も折り、藝の家を作って、一人で、長い間、遊んでいました。

小鳥の声で、早く目覚めた時には、娘と一

緒に、近くのパン屋さんに、朝食用のブロートヒェンを買って行っていました。そこには、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女のパン焼きがまに似た、大きなかまどがありました。実は、それは、パン屋の店員さんが休暇で旅に出してしまった日に、裏口から庭に入って、パンを買ったことが一度あり、見たことです。

「ヘンゼルとグレーテル」と言えば、娘が何度でも話してとせがむ話のひとつです。とりわけ、お菓子の家を、ヘンゼルとグレーテルがかじる所の科白が大好きです。

≪ Knusper, knusper, Kneischen,

Wer knuspert an meinen Häuschen? ≫

「ポリポリ、ポリポリ、ポリポリ！」

わたしのおうちをかじているのは、だれだい！」

子どもたちは答えます。

“Der Wind, der Wind,

Das himmlische Kinde”

「風だよ！風だよ！

天の子だよ！」そういつて食べつづけました。

（小沢俊夫訳「完訳グリム童話」Ⅰ）

風だよ！の後の部分は、最初はなく、ドルトヒェンからの聞き書きにより一八一九年の第二版から付加されたといえます。

娘は、「お母さん、ほりほり、がりがりの所を、魔女のように、怖く言って」とせがみます。そして、次の「風だい、風だい…」の件を、自分流に、種々、変化させて、言ってみるのです。

百六十年前には、ドルトヒェンは、ここをどんなふうに語ったのでしょうか。歌にして語ったのかも知れません。ヘッセン地方の、童歌だったのかも知れませんが、文章化され

てしまった現在、それを知る由もありません。

しかし、科学的眼差の兄ヤーコプと、詩的眼差の弟ヴィルヘルムという絶妙なコンビから生まれた、グリム童話の言葉が持つ、不思議な生きた力が、遙かな時代の流れを越えて、娘の唱える言葉の中に、みずみずしく蘇ってくるのを感じます。

ここ信州松本は、標高が高い為か、山の多い北国（ヘッセンと同じく、季節により、様々な風が吹きます。子どもは、とりわけ、その風を敏感に感じとっているようです。娘は、特に、風の話が好きです。宮沢賢治の「水仙月の四月」「風の又三郎」そして、今、お話ししている、グリム童話の中を吹き渡る風。「風って素敵でしょう。いろんな所へ自由に行けるでしょう。縄とびしている時、走り回っている時、私の回りで、風が起るの！

お母さんも風になってみたいでしょう……」
髪を長くしている娘は、時々、こんな言葉
も唱えています。

「ふけ、ふけ、風よ、

キュルトぼうやの帽子をとばせ、

きりきりまいをさせなさい、

わたしがかみをあんで、きれいに

またゆいあげるまで。」

(高橋健二訳「グリム童話全集」Ⅱ)

センダックは、「子どもたちは、グリム童話のすべてに内在する意味を読む」と言っています。娘も、今まで述べてきたように、グリム童話に対して、特別の感受性を持っているようです。何故、子どもが、昔話に、特別の感受性を持つのかは、フロイト派のベッテルハイムやユング派の人々の著書に触れられています。核家族の中で育っている現代の子どもには、グリム童話は、その出版当時よ

りも、必要なものになっているのではないでしょうか。

「グリム童話」は、安易な翻案絵本や、漫画調のものも多く出版されています。残酷な部分を省いてしまったり、変えてしまうような擬い物でなく、子どもに与える時こそ、原本に、忠実なものを選ぶべきです。

幸福なことに、私が初めて、グリム旅行をした四年半前には、日本語になっていなかったものが翻訳され、身近に入手できるようになりましたので、それも含めて紹介します。

○一八五七年の第七版・決定版からの翻訳
「グリム童話全集 全3巻」高橋健二訳、S51年、小学館

「岩波文庫、完訳 グリム童話集 全5冊」

金田鬼一訳、一九七九年改定

○一八一九年の第二版からの翻訳

「完訳、グリム童話―子どもと家庭のメルヒ

エン集―全2巻」小澤俊夫訳、S 60年、ぎょうせい

これは、訳者の言うように、口伝えされ、耳で聞かれてきたメルヒェンの姿を尊重してあり、素朴で耳から聞くのに適しています。

この版の口絵には、ルートヴィヒの描いた「兄と妹」花環、フイーメニンが再現されています。私は、K. Dielmanの本でこの絵を見て感動し、ルートヴィヒの「兄と妹」の水彩の原画を求めて、ハーナウの城を訪ねた、何年か前の夏の日のことを懐しく思い出しました。

完訳では、ありませんが、母親が子どもに読んであげること考えて翻訳されたものに「語りつくぐ グリムの昔話 全2巻」乾侑美子訳、一九八四年 ペンギン社 があります。

さし絵を楽しみながら読むグリム童話とし

ては、ルートヴィヒの他に、センダック著の「ねずみの木」エルベルトから出版されているオットー・ウベローデの全3巻があります。

ところで聖書に次いで世界じゅうの子どもに親しまれている、類まれな作品、グリム童話を、世に送ったグリム兄弟とは、どんな幼年期を過し、どんな生涯を送った人でしょうか。

「グリム兄弟」高橋健二著（新潮選書）は、そんな疑問を解くのに最もすぐれた、グリム兄弟の本格的伝記であると思います。私が、この本に出会ったのは、今から、十年前です。

幼年時代を、ハーナウ、シュタイナウの豊かな自然の中で過し、どんなささやかなものにも心を留める繊細さを培っていたことが

後の、野の花としてのメルヒェン蒐集の基になったこと。メルヒェンの蒐集には、一八〇八年のザヴィーニ教授の子ども達に送った手紙から始まり、一八五七年の決定版に至るまで、実に五十年の歳月をかけて取り組んでいること。グリム兄弟が、単にグリム童話だけでなく、古代ゲルマン文学、法律学、言語学、民俗学等の広い分野にわたる業績を残していること。(注)特に「ドイツ語辞典」編纂の完成までの百年にわたるいきさつ等、感動させられることが多いのです。

又、高橋氏の筆に最も力のこもる、ナポレオンのドイツ侵略、ゲッティンゲン大学七教授追放事件等、激動の時代の中であって、象牙の塔のみに閉じ込めることなく、勇敢に生き抜いたグリム兄弟の生きる姿勢には、現代に生きる私達にも多くの示唆を与えてくれます。

(注)「現代に生きるグリム」谷口、村上、風間、河合、小沢、Hレレケ著、岩波書店、一九八五年

私は、この「グリム兄弟」の伝記の感動から、自分自身の足で、グリム兄弟の足跡を確かめたい思いにかられ、グリム兄弟の原風景を求めて、グリム縁の地ハーナウ、シュタイナウ、カッセル、マールブルク、ゲッティンゲン、パリ、ベルリンと、娘を連れて、^{ライゼ}グリム旅行を始めました。

ドイツは、比較的、昔のままの姿を残す国ですが、戦災で破壊されてしまった所も多々あります。

そんな時、ルートヴィヒ・グリムの気どらない何枚かの絵が、旅先で、私を暖く迎えてくれ、グリム兄弟の魂の故郷を、私に、そつと、垣間見せてくれました。ハーナウの城を見た、グリム兄弟を思わせる「蝶の採集をし

ている少年」の油絵。マールブルク大学の博物館の「ヘンセン地方の民族衣装を着た娘」カッセルのグリム博物館でみた、グリム童話第二版の「フィーマニンの肖像画」等……ルートヴィヒのグリム童話につけたさし絵の原画と、その為の何枚かの習作も、そのひとつです。

昨年の渡独の際は、グリム兄弟生誕二百年記念の催物が行われていました。

マールブルク大学の図書館では「グリム兄弟とザヴィーニ展」が開かれており、ヤーコブ・グリム手書きの一八〇八年版の *Run-pensünzchen* の原稿を目交することができました。

六月十四日には、シュタイナー学校の講堂で「グリム兄弟が集めた民謡の夕べ」が開かれ、ヘッセンの民族衣装を着た男女と華やぎの時を過しました。

グリム兄弟は、グリム童話と同じように、生誕二百年後の今でも、ドイツの人々の心に生き続けているのです。

この拙い文が、あなたの手元に届く、八月にも、私は、高く澄みきった青空から吹き渡る、涼やかな風が、軒につるした七夕人形を、揺らせている傍で、ヘッセンの風や雲や花が織り込まれ、ぼろぼろになりそうなグリム童話を、娘達に読んでやっていることでしょうか。

なにしろ、グリム童話は、グリム兄弟の原風景と重なり合って、私の心の中に、小さな若葉にたまった、ひと雫の露が、今、朝焼けの最初の光をあびて輝いているように、きらきらと輝き始めたばかりですから。

五月 松本にて